

1. はじめに

一般社団法人あいあいネットは、NPO 法人共存の森ネットワークと協働し、2012 年からインドネシアの高校生を対象に、「聞き書き」を活かした環境教育プログラムの創出に取り組んできた。本事業は、これまでの取組と成果を踏まえ、インドネシアの高校、政府機関、大学、NGO などとの連携・協働をさらに強化することで、「聞き書き」手法を活かした環境教育プログラムがインドネシアで自立的、発展的に実践される仕組みの構築を目的としている。

平成 31 年度までの 3 年間の取組を想定し、二年目にあたる平成 30 年度は、以下の活動を柱として実施した。

- 1) 聞き書き研修の実施 (2018 年 7 月、8 月)
- 2) ゴロンタロでの聞き書き成果中間報告会 (2018 年 10 月)
- 3) 聞き書きコンテストの実施 (2018 年 12 月)
- 4) 聞き書き成果発表会の開催 (2018 年 2 月)
- 5) 協力機関・組織との連携強化
- 6) インドネシアでの聞き書き実行委員会・事務局の組織化
- 7) その他の成果

昨年度は、「聞き書き成果集」の出版が完了する 2018 年 5 月末まで期間延長したことから、本報告では、2018 年 6 月から 2019 年 3 月までの取組を報告する。なお、今年度の活動も昨年度に引き続き、りそなアジア・オセアニア財団の助成に加え、NPO 共存の森ネットワークがうけている地球環境基金の環境助成をもとに進めた。

2. 活動報告

1) 聞き書き研修の実施 (2018 年 7 月、8 月)

当初計画では、2 年目は、ボゴール(もしくはジョグジャカルタ)で複数地域の高校生を招く形での聞き書き研修を計画していたが、昨年度末から、ゴロンタロ国立大学との連携が急速に展開したことから、7 月にゴロンタロ国立大学、8 月にボゴール農業大学付属コルニタ高校の二か所でそれぞれの地域の生徒を対象に聞き書き研修を実施した。

【ゴロンタロ】

ゴロンタロ国立大学の聞き書き研修は、ゴロンタロ国立大学とゴロンタロ州政府との連携により、7 月 19 日(金)~21 日(土)の 3 日間開催した(表 1)。ゴロンタロ州内の 25 高校からそれぞれ 2 名の生徒と 1 名の教師の 3 名、計 75 名が参加した他、ゴロンタロ国立大学の教員、ゴロンタロ州政府関係者、日本の聞き書き関係者、インドネシアの聞き書き関係者ら、計約 110 名が参加した(表 2)。研修では、パル、ボゴール、パランカラヤから聞き書き研修の修了生を各 2 名招聘し、彼らが研修のファシリテーターをつとめた。ゴロンタロ国立大学

とゴロンタロ州政府の協力を得られたことから、ゴロンタロ州内の参加者の旅費および研修の会場費・研修中の食費はすべてゴロンタロ国立大学が負担した。日本側は、ゴロンタロ外部からの関係者の交通費・宿泊費・謝礼のみ負担した。

表 1: ゴロンタロでの聞き書き研修スケジュール

月日	主な活動
7/19 (木)	16:00 参加者がゴロンタロ国立大学に集合。オリエンテーション 19:00-21:00 開会式 (副学長、州知事代理、主催者挨拶)
7/20 (金)	8:30～ 全体的な説明 (あいあいネット 島上宗子) 9:00～ 日本における聞き書きの紹介 (共存の森ネットワーク 松田和憲) 9:30～ インドネシアにおける聞き書きの紹介 (ボゴール農業大学 Zaenal Abidin) 10:00～ 聞き書きの手法とインタビューの方法 (聞き書き修了生 Putri Restriana Zahra, Eno Trianti) 11:30～ 昼食と金曜礼拝 13: 30～ グループに分かれて聞き書きワークショップ (聞き書き修了生 6 名が各グループのファシリテーターを担当) (1) 「名人」の経歴をもとに質問を考える／録音方法の確認 (2) 実際にインタビューを実践 (ゴロンタロの高校の先生に対して) (3) 書き起こし (4) 文章整理 16:00～ 一日目の講評 (NGO Ininnawa Nurhady Sirimorok) 16:30 一日目終了
7/21 (土)	8:00～ ワークショップ 2 日目 (5) 書き起こした文章を整理する (6) タイトル、見出し・小見出しをつける (7) 各グループ成果発表・共有 11:00～ 講評 12:00～ 昼食 13:30～ よい写真の撮り方 (写真家 Armin Hari) 14:30～ 今後の進め方の説明 アンケート記入 15:00～ 記念写真撮影 15:30 終了

表 2: 2018 年度の聞き書き研修参加者の内訳

ゴロンタロでの聞き書き研修 (2018 年 7 月 19-21 日、ゴロンタロ国立大学)		
高校関係	ゴロンタロ州内の 25 校から生徒(計 50 名)、引率教員(計 25 名)	75 名
政府関係	ゴロンタロ州知事代理、教育局関係者	数名
大学関係	ゴロンタロ国立大学副学長、研究・社会貢献機構機構長、研究・社会貢献機構研究員・スタッフ	約 20 名
【ボゴール】	NPO 共存の森ネットワーク(松田和憲)、あいあいネット(島上宗子)、ボゴール農業大学(Zaenal Abidin)、NGO Ininnawa(Armin Hari, Nurhady Sirimorok)、NGO Jalin(David Lamanyuki)、聞き書き修了生/ファシリテーター(Futri, Eno, Alan, Rahma, Noventri, Mahadika)	12 名
		計 約 110 名

ボゴール・コルニタ高校での聞き書き研修 (2018 年 8 月 6 日、コルニタ高校)		
高校関係	コルニタ高校の生徒(50 名)、教員 5 名	55 名
聞き書き関係者	ボゴール農業大学(Zaenal Abidin)、聞き書き修了生/ファシリテーター (Futri, Eno)	3 名
		計 約 60 名

【ボゴール】

2012 年度以来、毎年、聞き書き研修を実施しているボゴール農業大学コルニタ高校では、今年度も高校の課外活動科目として、8 月 6 日に聞き書き研修が実施された。実施費用はすべてコルニタ高校が負担した。50 名の生徒が参加し、聞き書き研修の修了生 2 名、ボゴール農業大学の Zaenal Abidin、コルニタ高校の教員 5 名がファシリテーターを担った。

【パル】

9 月 28 日、これまで「聞き書き」に参加してきた高校が位置するパル・ドンガラ・シギ地方を震災・津波が襲った。パルでは、今年度は聞き書き研修の実施は見送ったが、ドンガラ県のバナワ高校の生徒 6 名が震災後 3 カ月たった 12 月、被災者の聞き書きを行った。バナワ高校では、聞き書き研修修了生と教員が呼びかける形で高校の自主活動として「聞き書きコミュニティ」が組織されている。この「聞き書きコミュニティ」の活動として、聞き書き研修修了生が後輩を指導し、6 つの聞き書き作品がしあがった。

2) ゴロンタロでの聞き書き成果中間報告会 (2018 年 10 月)

ゴロンタロでは、ゴロンタロ国立大学の主導と予算により、10 月 12 日(金)～13 日(土)にゴロンタロの聞き書き研修参加者を対象とした聞き書き成果発表会が開催された。33 名の生徒からの作品が提出され、各生徒が口頭発表した。島上が審査員の一人として参加した。33 作品の中から、上位の 29 作品が聞き書きコンテストに送られた。

3) 聞き書きコンテストの実施 (2018 年 12 月)

上記のように、今年は、2018 年 2 月にパラカラヤ、2018 年 7 月にゴロンタロ、2018 年 8 月にボゴールで研修を実施した。パラカラヤから 1 作品、ゴロンタロから 29 作品、ボゴールから 4 作品、パルから 6 作品の計 40 作品が集まった。このうち、パルからの 6 作品を除いた 34 作品を 7 名の審査員が審査し、上位 9 作品(ゴロンタロ 7 作品、ボゴール 1 作品、パラカラヤ 1 作品)を選定した。パルからの 6 作品は被災地聞き書きとして別途審査した。

パラカラヤは、研修に参加した生徒 25 名のうち、作品提出者が 1 名という状況になった。研修を実施した 2 月から作品提出締切の 12 月まで期間が長すぎたこと、その間のフォローが十分ではなかったことなどが要因と考えられる。これは今後の教訓として活かしたい。ボゴールのコルニタ高校からも 4 作品と少ない数にとどまった。高校の担当教員が体調不良でかわったことなどが影響しているとも考えられるが、来年度にむけ、改善すべき点

等、高校と話し合う予定である。

4) 聞き書き成果発表会の開催（2018年2月）

聞き書きコンテストの入賞者らを招き、聞き書き成果発表セミナーを2月2日にボゴール農業大学の共通教育機構(PPKU)との共催で実施し、約100名が参加した(ゴロンタロから生徒7名・教員2名・大学関係者2名、パラカラヤから生徒1名・教員1名、パルから生徒3名・教員1名、ボゴールのコルニタ高校の生徒・教員約20名、ボゴール農業大学の1年生約50名、マカッサルのNGOイニンナワのコーディネーター、バンドゥン工科大学の教員、日本から吉野奈保子(共存の森ネットワーク)と島上の2名、ジャカルタの企業・NGO関係者3名程度など)。

セミナーでは午前中にコンテスト入賞者の表彰と発表を行い、午後は「災害の経験に学び、次世代につなぐ聞き書き」と題したセミナーを開催した。東日本大震災後、聞き書き甲子園関係者が実施した支援活動と聞き書き活動の紹介(吉野奈保子)、パルの被災者の聞き書きを行った生徒の発表、バンドゥン工科大学の地震の専門家によるコメントとディスカッションを行った。

セミナーの翌日(2/3)には、聞き書きコンテスト入賞者らを対象に、ボゴールで環境問題に取り組む個人・グループを訪ねるフィールドトリップを実施した。

5) 協力機関・組織との連携強化

【ゴロンタロ国立大学】

今年度から、ゴロンタロ国立大学との連携がはじまった。ゴロンタロ国立大学では、聞き書きを研究・社会貢献機構(LPPM)の今年度のプログラムの一つとして位置づけ、約300万円を予算化し、パラカラヤでの聞き書き研修の視察(2018年2月)、州内の高校教員を対象とした聞き書き説明会(2018年3月)、聞き書き研修の実施(2018年7月)、研修後のモニタリング(2018年9月)、ゴロンタロでの聞き書き中間報告(2018年10月)、ゴロンタロの聞き書き成果集の出版(2018年12月、同封)が実施された。次年度も継続して聞き書きを機構のプログラムとして位置付けられる予定である。

【パラカラヤ市政府】

昨年度、連携が深まったパラカラヤ市政府は、高校の所轄が市政府から州政府への移管されたこと、2018年9月にパラカラヤ市長・副市長が任期終了により交代したことなどから中カリマンタン州政府との連携を探る必要がでてきた。地方政府は政治状況、役職者の交替により、大変不安定であることから、ゴロンタロのように、大学を通じて州政府と連携をはかるほうがスムーズにすすむ可能性もある。現在も連携の方向性を探っている状況にある。

【ボゴール農業大学】

ボゴール農業大学は、大学の初年次教育に「聞き書き」をとりいれていく方向に関心を示

している。2018年10月16日には、島上がボゴール農業大学の1年生120名を対象に聞き書きの紹介を行い、2019年2月の成果発表セミナーには1年生約50名が参加した。その後、ボゴール農業大学のZeanal Abidin先生とボゴール農業大学に入学した聞き書き研修生の生が研修を実施し、ジャワのいくつかの地域で聞き書きを実施中である。

【インドネシアの企業、団体等】

インドネシアでの「聞き書き」活動への支援の可能性についてジャカルタのいくつかの企業・団体関係者と情報交換を行った(クリタ・インドネシア、トヨタ・インドネシア、国際交流基金、吉本クリエイティブ・インドネシア、など)。連携していくためには、インドネシア側の組織と事務局体制の強化がまず必要であるが、今後も可能性を探していきたい。

【日本の大学・研究プロジェクト等】

日本側では、総合地球環境学研究所の研究プロジェクトとして進展中の「高負荷環境汚染問題に対処する持続可能な地域イノベーションの共創」(プロジェクトリーダー:榎原正幸愛媛大学教授、<http://www.chikyu.ac.jp/rihn/project/FS-2018-02.html>)から、「聞き書き」をプロジェクトのトランスフォーマティブ・バウンダリー・オブジェクト(TBO)の一つとして活用したいとの提案があり、プロジェクトとの連携のあり方を協議中である。

6) インドネシアでの聞き書き実行委員会・事務局の組織化

インドネシアでの聞き書きが広がるにつれ、インドネシア側での事務局体制の構築が喫緊の課題となっている。ボゴール農業大学のZaenal Abidin氏がインドネシア側の事務局長を担う方向で合意され、2019年のセミナー準備・開催時から「Kikigaki Indonesia」として動き出した。法人格取得に向けた組織形態と構成・規約等はできておらず、来年度の課題となっている。実務を担う事務局スタッフの確保、継続的な予算確保に向けた協議も現在進行中である。

7) その他

これまでのインドネシアでの聞き書きの成果を踏まえ、2018年8月11日~12日にゴロンタロで開催された国際会議 The 3rd International Conference of Transdisciplinary Research on Environmental Problems in Southeast Asia (TREPSEA2018)にて以下の報告・発表を行った。

Shimagami, Motoko. “Learning from Villages, Connecting Generations: Experience of *Kikigaki* Program, Japan” (招聘講演)

Shimagami, Motoko, Hiroki Kasamatsu, Masayuki Sakakibara. “*Kikigaki* Program as a Transformative Boundary Object for Stimulating Sustainable Regional Innovation through Cross-generational Urban-Rural Interaction: Case studies from Japan and Indonesia” (セッション発表)

3. 今後の課題

今年度は、特に大学機関(ゴロンタロ国立大学、ボゴール農業大学)との連携が進んだ。連携の広がりとともに実務の負担が増えており、Kikigaki Indonesia の組織・事務局体制の整備とスタッフの確保が不可欠となってきた。最終年度となる 2019 年度は、自立的で継続的な体制づくりにむけ、聞き書き研修・聞き書きコンテスト、成果発表会の実施に加え、1) インドネシア側の事務局と組織体制の確立と強化、2) 関連機関との連携の強化(覚書の締結などによる継続性の担保)、3) ホームページや SNS を通じた取組内容の発信、4) インドネシア側での資金の獲得、にさらに力を注いでいきたい。

4. 予算の翌年度への繰り越しについて

ゴロンタロでの研修、ボゴールでの成果報告セミナーとも、その実施費用(人件費を含む)の大部分を両大学が負担してくれたことにより、りそなアジア・オセアニア財団からの助成金の大部分を 2019 年度に繰り越すこととなった。この繰り越し額は、インドネシアの事務局スタッフ人件費、ホームページの開設、連携強化の打ち合わせのための旅費等に使い、自立的継続的体制の強化を図りたい。